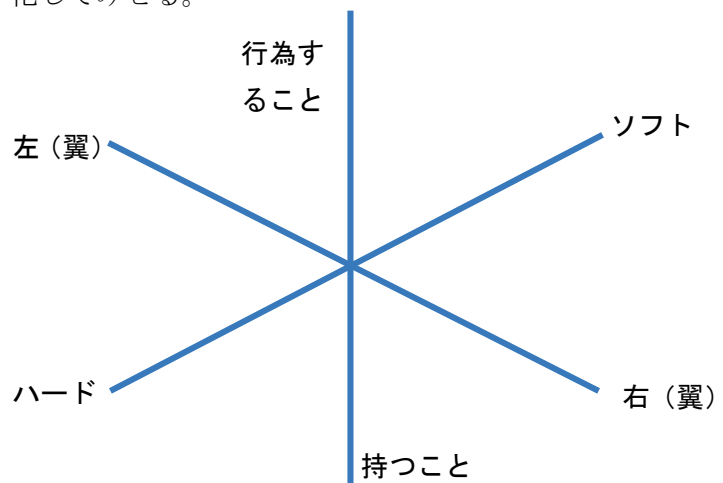


(承前)

2 公的選択の三つの次元 (37～72 頁)

A) 公的選択の三つの次元 (37～49 頁)

- 人間生活の自立と自存（サブシステム）にたいして仕掛けられた戦争が人々をどこに導いてきたかは、発展＝開発を鏡にすることでよくわかる。1960 年代、「発展＝開発」は「自由」や「平等」と肩を並べる地位を得てきた。他の民族の発展を進めることは金持ちたちの義務と責任になり、発展はまるで建設計画であるかのように語られた。
- しかし今日、道具主義の観点から望ましい社会像を描くことのできる批判的思想家はほとんどいない。二つの理由が多くの人々の心を変えたのである。
- 一つは、望ましくない**外部不経済**（externality）¹が利益を上回る事態を招来してしまったこと。今一つの面が**逆生産性**である、とイリイチは指摘する。
- イリイチは、外部不経済は消費者が支払う価格の「外部に」あるコストであるのに対して、逆生産性は、購買された商品の使用の「内側で」生じる新たな種類の失望であると説く。
- 逆生産性＝内部不経済は、現在の産業制度において不可避な構成要素で、貧困層に熾烈な欲求不満を強いるものでありながら、経済学者はそれを捕捉することができていない。つまり、イリイチは、彼がこれまで取り上げ、批判的な言説を積み重ねてきた、学校（教育）、病院（医療）、交通（エネルギー）等の領域で生じている事態こそが逆生産性なのだと言っている。
- 今日の下層階級は、開発や経済成長を経た結果、逆生産性の消費を強いられている。
- ここから、イリイチは、今日的な社会問題が描き出す政治に関わる選択の領域を三次元のマトリックスとしてモデル化してみせる。



¹ イギリスの経済学者 A.マーシャルが用いた言葉で、市場を通じて行われる経済活動の外側で発生する不利益が、個人、企業に悪い効果を与えることをいう。外部不経済の代表的な例としては公害問題がある。（ブリタニカ国際大百科事典）

- X 軸（「左」と「右」で表される問題、社会の階層性、政治的権威、生産手段の所有、資源の配分をめぐる諸問題）
- Y 軸（「ハード」と「ソフト」とのあいだの技術上の選択、財とサービスに関連する技術上の選択の問題）
- Z 軸（人間の満足＝欲求充足の性質それ自体の問題、E.フロムの定義した「持つこと」と「行為すること」とに充足を見出すのに適した社会組織の問題）
- Z 軸の下限には商品集中社会が位置し、限界効用の観念に突き動かされる諸個人によって形成される人類のイメージが布置されている（ルイ・デュモンが「ホモ・エコノミクス」と呼んだ人間観）。
- Z 軸の上限には、成長の要求に懐疑的であり、サブシステムを志向する活動の周囲に組織された様々な形態の社会が、扇形に並ぶものと類推されている。
- イリイチは、この Z 軸上の対立を、経済成長につかえる社会と、サブシステムを志向し、共同の環境の使用が生産と消費にとってかわることに高い価値を与える社会との対比、すなわち「ホモ・エコノミクス」と「ホモ・アーティフィクス (homo artifex)」の対比として描き出していく。
- イリイチによれば、現代社会の形態は、これらの独立した三つの軸に沿って今なお行われている（不断の）選択の結果なのだが、当今の政治の概念作用は全てを一元化して捉えようとするので、これらの選択の大部分は、環境を「ホモ・エコノミクス」用の檻に一次的に組織してしまう。
- イリイチは、ここから導き出される展望として、社会の諸部分が明確に分節され、独自に関連づけられたイメージを、美しく優美な社会イメージとして措定し、それらの社会イメージ、美的で倫理的な範例が、経済指標による競争にとってかわるような世界を夢見ており、それを実現するためには、開発の視点から国際的な南北関係の問題をみるような認識のあり方が破棄されなければならないと考えている。
- このような観点から、完全雇用の問題も再検討されなければならない。
- 10 年前（1960 年代末）、開発や政治にたいする態度は今よりも単純で、仕事は雇用と同一視され、名誉を伴う職業は男性に限られていた。就職口と切り離されて行われる〈シャドウ・ワーク〉の分析はタブーであり、左翼は原始的再生産の残滓として〈シャドウ・ワーク〉に言及し、右翼はそれを組織された消費だとみなすに留まっており、両者とも、開発が進めばそのような労働は消えていくと考えていた。
- それゆえ、雇用の増加を求め、同等の仕事に対する平等な賃金や、すべての仕事の賃金引き上げを求める闘争が行われてきたが、この闘争は、賃金労働から切り離された他のすべての労働を、政治学や経済学の死角に隠されてしまう影の一隅に押し込めてきた。
- フェミニストたちが「媒介構造」に注目しつつ、賃金の支払われない貢献について検討を始め、「再生産」を生産に対する補完物として捉え、様々な議論を展開しているが、

それらの要求を通してみると、完全雇用という目標は、開発という目標と同様に疑わしいものに思われる。

- そして、それを感じ取り、仕事の性質そのものに疑問を投げかける新たな役者（論者）たちは、賃金が支払われる支払われないを問わず、産業的に構造化されている仕事と、雇用と職業的保護の制約を越えた領域で行われる人間的生活の創造とを区別するようになる。その区別は、先述の Z 軸上の中心となる問題点を提起することになる。
- 商品集中社会では、日常の基本的なニーズは賃労働の生産物で満たされる。商品集中社会を動かす労働倫理は、給料や賃金のための仕事を正統化し、それと反対に自律的な活動の価値を引き下げる。
- さらに、賃労働の一般化は、新たな種類の支払われない仕事、産業的な労働とサービスにとっての支払われない補足物を生み出す。
- であるが故に、商品集中経済に奉仕する一種の強制労働や産業奴隷と、産業制度の外部に横たわるサブシステムを志向する仕事は、注意深く区別されなければならない。
- その区別が明確に活用されない場合、賃労働の拡大に伴い専門家が生み出す新たな支払われない仕事は、抑圧的な生態学的福祉社会を通して広がるだろう、とイリイチは予見している。
- イリイチによれば、家庭内という領域での女の隷属状態は、その今日的な事例となっている。昔は女の仕事の大部分はサブシステムを目ざす活動だったが、現代の家事は、生産を支えることに向けられた商品によって規格化され、性別を明確にする仕方で女たちに強制され、賃金労働者を再生産し、休養させ、賃労働にかりたてる原動力となる役割に彼女たちを押し込めている。
- だが、このような家事労働は、広範な〈影の経済〉の一つの表れでしかなく、〈影の経済〉は、拡大する賃労働の必然的な補足物として産業社会のいたるところに発達してきている。
- この影の補足物（Shadow Work, Shadow Economy, Schattenarbeit[独], Travail Fantôme[仏]）は、正規の経済とともに産業的な生産様式の一構成要素だが、量子理論以前に素粒子の波動性が物理学から見落とされていたように、これまで経済学の分析の手をすり抜けていた。それ故に、正規の経済用語をこの影の補足物に適用しようとすると、その適用は概念自体を歪めてしまう。
- したがって、賃労働の拡大によって生じる、賃金が支払われない二種類の活動（p.46）の本質的な差異とは、賃労働を補う〈シャドウ・ワーク〉とサブシステムを志向する仕事における差異であり、その違いは一貫して看過されてきたのである。
- コミュニティがサブシステムを志向する生活の仕方を選ぶとき、開発は逆転され、消費財はその人自身の行動に置き換えられ、産業的な道具は生き生きとした共生（conviviality）の道具に変えることが目標になる。そこでは賃労働と〈シャドウ・ワーク〉はそれこそ影をひそめることになる。

○そこでは各労働者がみずからの生産手段をみずからの手でコントロールすることによって、おのおのの事業の小地平が決定され、それは労働者の個性の開花や社会的生産に欠かせない条件となる。この生産様式は、生産と社会の双方に対して自然が支持する限界内でのみ維持される。そこでは創造的失業〔非雇用〕が尊ばれる。

B)開発とオルタナティブ (49～54 頁)

- 「開発 (development)」という言葉が今日的な意味あいを持つようになったのは、1949 年 1 月にトルーマン大統領が「ポイント・フォア」計画を発表した時である。
- それまで「開発」という言葉は、生物の種、不動産、チェスの駒の動きについて使われていたのであり、国民、国、経済的戦略について述べるのに使われたのは、その時が初めてである。
- 以降、開発理論は巷に満ち溢れ、「成長」「追いつく」「近代化」「帝国主義」「二重性」「従属性」「基本的ニーズ」「技術移転」「世界システム」「内発的産業化」「一時的な切り離し」等の概念を提供するようになる。
- これらの概念は第一の波として、自由企業体と世界市場の高揚をはかるプラグマティストたちを運び、第二の波として、イデオロギーと革命とを力説する政治家をもたらした。
- イリイチによれば、開発の概念は、根本的に以下のことを含意している。
 - ①サブシステンスを目ざす人間の力を、商品の使用と消費に置き換えること。
 - ②賃金労働の他のすべての仕事に対する独占。
 - ③専門家の企画にしたがって大量生産される商品とサービスの観点からニーズを再定義すること。
 - ④空間、時間、材料、デザインがどれも生産と消費に好都合にはたらくように環境を再編成すること。
- したがって、開発を志向することは、使用価値を志向する活動を縮小させ、無力化する。そして、そのような変化と過程は、世界的な規模で同質的に進行し、不可避で好ましいものと評価されてきた。
- 開発を担う産業的人間の理想像は、産業的労働に携わる人物に集約され、メキシコではリベラ²やオロスコ³といった画家たちの作品に表現されている。
- しかし今日、産業的人間の理想像はぼやけ、賃労働の威厳と喜びを讃えるスローガンは弱々しく聞こえる。
- 失業という言葉は 1898 年に、固定収入を持たない人々を指す語としてはじめて導入されたが、今日では最低限の生存状態を意味している。

² ディエゴ・リベラ - Diego Rivera, 1886 年 12 月 8 日 - 1957 年 11 月 24 日、メキシコの画家。キュビズムの影響を受けた作風で、多くの壁画作品で知られる。フリーダ・カーロの夫。

³ ホセ・クレメンテ・オロスコ - José Clemente Orozco, 1883 年 11 月 23 日 - 1949 年 9 月 7 日、メキシコの象徴主義の画家、メキシコ壁画運動の著名な芸術家。



Palacio de Bellas Artes - Mural El Hombre in cruce de caminos Rivera



A Call to Revolution - Orozco

○開発への挑戦は多様な形態とり、ドイツだけでも数千もの集団が産業的なあり方に代わるもう一つの道（alternative）を求める実験に取り組んでいるし、同じことはフランスやイタリアについてもいえる。

- このような実験に従事する人々にはブルーカラー家庭の出身者が多く、彼らの大部分にとっては、賃金で生計を立てることにいかなる尊厳も残されていない。彼らは「消費からプラグを抜こう」としている。
- 合衆国では、少なく見積もっても 400 万人以上の人々が、このように小さな、高度に分化した共同体の奥底に暮らしている。そして彼らと同じ価値観を有している者は、少なくともその七倍は数えられる。
- たとえば女性は、婦人科医学に代わるオルタナティブを、親は学校に代わるオルタナティブを、自力で家を建てる者は水洗トイレに代わるオルタナティブを、郊外に住む人々は通勤に代わるオルタナティブを、一般の人々はショッピングセンターに代わるオルタナティブを求めている。
- イリイチは、これらの試みのうちで最も成功した例として、南インドのトリバンドラムにおける図書館活動や、インドのビハールにおけるメディコ・インタナショナルによる保健の非医療化の試みを紹介している。
- 開発への異議申し立ては、このような実験的形態以外でも、法的、政治的な手段を利用することもある。これについては、オーストリアにおける原発稼働をめぐる国民投票やヨーロッパの「緑の党」、合衆国における高速道路やダム建設たちの市民運動の例が紹介されている。

C) ニーズの歴史に向けた素描 (54～72 頁)

- このような局面において、西欧的な「ニーズ」の概念の源泉を明らかにし、その生成の筋道を解きほぐすことは、歴史家と哲学者が負うべき課題である。
- 進歩の観念は、二千年間西欧を特徴づけてきたものであり、とりわけ西欧とそのアウトサイダーとの関係を決定してきた。進歩の観念はニーズへの信仰の背後に横たわっている。西欧は、産業社会に特有な「われわれ」(us) と「彼ら」(them)⁴ という二分法を輸出し、それは世界中に広がっていき、ヨーロッパが創始した万人救済という普遍的な使命に勝利をもたらしつつあるかに見える。
- しかし、開発を再定義し、その意味合いを更新したところで、それはインフォーマルな部門を専門的に植民地化 (Colonization) することによって、フォーマルな標準経済学のモデルにたいする西欧経済の支配を強化するだけである。イリイチは、(開発への批判は、より根底的になさなければ、実効性に欠けると考えているので?) 「発展＝開発」としてあらわれている概念について、外部との関係性の変化として表れている六段階の変遷を理解しておく必要があると説いている。
- 開発概念の歴史：第一段階
共同体の外部世界にたいする普遍的な救済の伝道の発生、西欧教会における救済の自

⁴ どうでもいいことだが、Pink Floyd の 1973 年の大ヒットアルバム The Dark Side Of The Moon (邦題「狂気」) の中に Us and Them という楽曲がある。Richard Wright と Roger Waters の合作。

己責務化。

○開発概念の歴史：第二段階

外部世界の者たちの捉え方が、野蛮人から異教徒へと代わる。

○開発概念の歴史：第三段階

イスラム教徒の登場、異教徒が反キリスト教的な不信心者になる。

○開発概念の歴史：第四段階

イベリア半島におけるレコンキスタの完了、コロンブスによる新大陸の発見、スペインにおける王権の教皇権に対する優越に伴い、フマニストの文明化の役目を脅かす未開人（wildman）のイメージが登場する。また、これらの未開人はニーズを持たない者と考えられた。

○開発概念の歴史：第五段階

植民地主義と重商主義の企図にとっては、ニーズを持たない存在は脅威であり、ニーズを持たない未開人にニーズを植え付けるためには、彼らを原住民（native）に仕立て直さなければならなかった。原住民は人間であり、ニーズを持つものと考えられたが、そのニーズは文明人のそれとは異なるものと考えられた。

○開発概念の歴史：第六段階

原住民の低開発国民への変身。第二次世界大戦後のマーシャル・プランの頃には、多国籍企業が拡大し、国境を超えて、教育学者、セラピスト、経済計画のプランナーたちの野心が限界なく膨張し、世界に広がっていった。植民地の解放が進む一方、全てが開発の度合いのもとで測られるようになった。植民地の解放はまた改宗の過程でもあり、「ホモ・エコノミクス」の概念は、さらにそれを先鋭化した「ホモ・インドゥストリアリス」（homo industrialis）のイメージとして世界中に受容された。

○一人当たりの高エネルギー消費量と専門家による夥しい世話（care）をもとにする開発は、このような西欧の伝道の努力が生んだ最も有害なものだとイリイチは断じている。開発は、人間による自然の管理という生態学的に実現不可能な観念によって導かれた企画であり、人類学的にみてきわめて悪質な試みである、と。

○イリイチは、いまや生態学的・人類学的リアリズムが必要であるという。だが、そのためには用心が肝要だという。何に対する用心か？それは、ソフト・パスや自助という方途に導かれる陥穽への用心である。

○エイモリー・ロビンズ⁵は、成長をこれ以上続けることができるかどうかは、ソフト・（エネルギー）・パスに速やかに移行できるかどうかにかかっているというが、それはあくまでも成長を前提にしたものである。その限りにおいてイリイチはロビンズの意

⁵ Amory Lovins・1947年11月13日（66歳）、ロッキーマウンテン研究所 共同創設者・チーフサイエンティスト。40年以上にわたり、米国のエネルギー省をはじめとする各国政府機関や、世界中の大手企業のアドバイザーを務め、主に先進エネルギーや資源効率、戦略、安全保障、統合設計デザインについて助言している。多数の著書があるが、イリイチが言及しているのは、Soft Energy Paths: Towards a Durable Peace San Francisco: Friends of the Earth International, 1977 年。

見に同意しているが、今や、ソフトな移行過程とソフト・エネルギー（再生可能エネルギー）は左右双方の官僚制を拡張するための格好の言い訳となっており、商品とサービスの規格化された生産を通じて増大するニーズを満たすための合理的な根拠にもなっている。

- 高い教養の持ち主で共産主義者のヴォルフガング・ハーリッヒ⁶は、二度にわたる孤独な牢獄での監禁状態を経験し、自己の信念をみがき、鍛え上げた人物だが、その彼も東ヨーロッパにおけるソフト・パスのスポークスマンとなっている。ロビンスにおいては分散型の生産への移行が市場経済に依存しているが、ハーリッヒの場合、この移行の必然性は、スターリン主義者の生態学を支持する議論として構成されている。つまり、左右いずれの論客にとっても、ソフト・パスは、増大するニーズを満たすために不可欠な手段となっているのである。
- ソフト・パスは、「民衆が生存と喜びに必要と判断することを自ら行う能力を保持した生き生きとした共生の社会」か「完全雇用の目標が賃金の支払われる活動も支払われない活動も政治的に管理することを意味する新たな商品依存型の社会」かのいずれかに通じている。そして、それがいずれに向かって進むかは、先に示した Z 軸の「所有」か「存在（行為）」かのあいだの選択にかかっている。
- 賃金労働と、その支払われない補足物の理想型たる家事労働は、歴史上、また人類学的にみても前例のない活動形態であり、それらは絶対主義国家と、その後には産業国家が、自立と自存を目ざす生活のための社会的条件を破壊したところで繁茂する、とイリイチはみている。
- 伝統的な経済分析は、産業時代のこの相補的な二つの活動の一方にのみ、つまり賃労働にもっぱら関心を集中してきたが、この傾向は急速に変わってきている。
- フェミニストたちによる、仕事に関する歴史的かつ人類学的な研究の結果、産業社会の労働が、他のいかなる社会にもまして、セックスに特有な方法で深く分極化されている事実を無視できなくなっている。
- 十九世紀に「先進」国では女性が賃金労働力の仲間入りを果たし、そのことで、女性も制限なく学校教育を受けることができるようになり、仕事の上でも平等な権利を持つようになった。
- ところが、このような勝利の結果は、古くからの知恵が女性たち割り当てていた仕事（ジェンダーに基づく仕事）とまったく逆の帰結をもたらすことになる。
- （女性の）「解放」とみなされたことは、支払われる仕事と支払われない仕事のあいだの対立を際立たせ、さらにそれは、支払われない仕事とサブシステムとのあいだのつながりをすべて断ち切り、支払われない仕事の構造を再規定してきた。その結果、支払われない仕事は、女性にいやおうなしに負わされる新たな形の隷属となっている。
- ジェンダーに特有な任務は格別新しいことではなく、既知の社会ではすべて、ジェン

⁶ Wolfgang Harich - 1923 年 12 月 3 日 - 1995 年 3 月 21 日、東ドイツのジャーナリスト、哲学者。

ダーに仕事の役割が振り分けられている。ところが、現代のように、仕事が、支払われる仕事と支払われない仕事のように二つの形態に分裂している事例は、過去の諸文化の中には見つけることができない。

- もとより、多くの社会において賃金労働と〈シャドウ・ワーク〉の形跡を見つけることはできるが、それが仕事についてのその社会におけるパラダイムになることはありえなかったし、それがセックスに特有な方法で労働の分割の中心的なシンボルとして利用されることもありえなかった。
- したがって、「ホモ・エコノミクス」は最初から、勤労者 (*vir laborans*) と主婦 (*femina domestica*) といったカップルで創られたのであり、そのようなセックスによる分割を土台に、「ホモ・インドゥストリアリス」はつくられた。完全雇用を目標に発展してきた社会で、〈シャドウ・ワーク〉が完全雇用とともに成長しないような社会はどこにもなかった。
- ごく最近では、生産機能と消費機能のあいだに設けられていた区別は機能不全に陥っている。男性と女性の利害関心が相反し、相対立するようになって、賃金の支払われない仕事の重要さが議論的になり、「インフォーマル」な部門で起こることに値段がつけられるようになってきた。
- 「ヴァナキュラー」という用語の導入。イリイチは「インフォーマルな部門」「使用価値」「社会的再生産」といった用語がカバーしている領域内において、ヴァナキュラーということで区別することができるものを指し示すことができる既存の用語を他に思いつかないとして、この用語の導入を提案している。
- ヴァナキュラーとは、ラテン語の用語で、英語として用いられる場合は、有給の教師から教わることなしに習得した言語にたいしてのみ使われる。ローマでは紀元前 500 年から紀元後 600 年にかけて、家庭で育てられるもの、家庭でつくられるもの、共用地に由来するものなどの価値を表す言葉として使われた。それらの価値は人間が保護し、守ることができる価値であり、市場では売買されない価値として使われた。イリイチはこの用語の導入によって、賃金労働の補足物たる〈影の経済〉と〈ヴァナキュラーな領域〉とを区別することが可能になると主張している。
- ヴァナキュラーな仕事と産業労働とのあいだに生じる緊張とバランスは、第三の選択の次元 (Z 軸上の所有か行為かの選択) における中心的な問題であり、それは政治上の左・右の次元、技術上のハード・ソフトの次元とは明確に区別される。
- イリイチは、開発、賃金労働およびその影が、ヴァナキュラーな仕事を蚕食する時、そのいずれが比較的優勢となっていくのかは重大な問題であると考えている。
- 一方に産業社会の階層性に規定された職業選択の自由があり、今一方にサブシステムに向けた行動の自由がある。しかし、膨張する経済は〈影の経済〉の成長を促し、〈ヴァナキュラーな領域〉はますます縮小されてしまう。この場合、雇用の稀少性が高まるとともに、失業者はインフォーマルな部門に組織される有用な活動のなかに統合さ

れていくだろう、とイリイチは予見している。

- 産業社会の開発推進者たる官僚たちは〈影の経済〉の開発を進め、これに反対する者たちは、ソフト・テクノロジーの使用に反対し、〈ヴァナキュラーな領域〉の拡張する自由を求めて奮闘している。
- 「豊かさ」という名の現代の「デモンストレーション・モデル」に多くの人々が囚われているが、それらの多数派を解放するためには、二つの条件が満たされていなければならないとイリイチは説く。
- 第一に、人間と道具のあいだの新たな関係から生まれたライフスタイルは、「ホモ・インドゥストリアリス」ではなく「ホモ・アーティフィクス」であるという認識によって活性化されねばならない。
- 第二に、商品から独立化したライフスタイルは、それぞれの小さな共同体のなかで新たに形成されなくてはならず、強制されたものであってはならない。何よりもヴァナキュラーな価値によって生活している共同体では、他の人に与えられるものといえは自身のモデルの魅力以外には何もない。
- 新しいやり方で生きることができるだけでなく、その上この自由を主張することができるようになるためには、「ホモ・エコノミクス」の人間化と、他のすべての人間のあり方との違いを明確に認識しておくことが必要である。イリイチは、この目的のために歴史研究を選択する。